

一般財団法人まちと人と 第4期事業報告

期間：2024 年 10 月 1 日～2025 年 9 月 30 日

【1】第4期の振り返り

■ 総論

第4期は、学校教育事業と地域教育事業を通じて、高校生が地域や社会と関わりながら学び、段階的に挑戦を重ねる場を提供しながら、法人内部では、ビジョン・ミッションの再定義や成果目標の設定を行い、リサーチ事業や研修、インターン育成などの取り組みを通して「主体的に参画する組織」への転換が進んだ。

一方で、KPI整理や広報・資金調達、事業妥当性やリソース配分の課題は残っており、事業を進めながら振り返り、改善を重ねていく必要がある。

■ 実施事業について

学校教育事業と地域教育事業を通じて、石巻地域の高校生が地域や社会と関わりながら学び、挑戦する場を提供できた。参加者自身の内発的な動きや主体的な挑戦を促す仕組みが整えられ、学びの定着や成長に結びついている。加えて、高校生が複数のプログラムに段階的に参加することで、経験や学びを積み重ねながら次の挑戦へ進む流れが生まれつつある。

・ 学校教育事業

高校生を対象に、探究授業支援とキャリア教育を実施。学校や教育委員会と連携し、学びの質と社会との接点を高める内容を実施。授業を通じて、地域課題の発見や自己理解の深化を行うことができた。

・ 地域教育事業

地域をフィールドに、高校生や中学生が主体的に活動する機会を提供。地域の大人や企業、団体と連携し、実践・振り返りを伴う学びを実現した。参加者は、地域での実体験を通じて自己の関心や挑戦意欲を高め、地域との接点を持つことができた。

■ 組織基盤の整備・強化について

・ ビジョン・ミッションの再定義と成果目標の設定

法人としての在り方と方向性を見直し、基盤を再構築する期間となった。「ビジョン」「ミッション」を再定義・刷新し、短期・中期・長期の成果目標（アウトカム）を設定。事業成果の妥当性と解像度を高める準備を整えた。この検討をスタッフ・役員が一体となって進めたことが、組織の結束を促す契機にもなった。

・ 成果目標の実現に向けた新たな動き

設定した成果目標の実現方法を検討する中で、組織内部から新たな動きが生まれた。主な取り組みは以下の通りである。

リサーチ事業（インパクトレポート作成チーム）の立ち上げ / 対話型研修による対人支援の振り返り / インターン大学生への育成プログラム実施 / クレド（行動指針）の検討・仮決定 / スタッフ・役員による全体会議 / MBO（目標設定）と面談の実施 / 次年度ファンドレイジングに関する会議の継続実施

スタッフの提案から始まった取組も多く、「主体的に参画する組織」への転換が着実に進んでいる。こうした一連のプロセスを通じて、法人は単なる事業実施主体から、成果と学びを自ら生み出し、内省と改善を重ねる組織へと変容しつつある。

■第4期の課題

・KPIと成果把握の課題

事業横断でのKPIが十分に整理されず、定量的な成果の把握が後手に回った。各事業の成果や進捗を可視化する体制の整備が十分でなかったことが課題となった。

・広報・発信の課題

広報活動は主に事業告知に偏り、理念やストーリーの発信が十分ではない。このため、活動の価値や社会的意義を外部に伝える力が弱く、資金調達や支援者との関係構築にも影響していた。

・資金調達とリソース配分の課題

以前からの課題である資金調達では、誰にどのような価値を提供すれば支援や資金を集められるかが明確でない。また、実施する事業の妥当性や法人としてのリソース配分の難しさも依然として残っている。これらは、すぐに答えを出せるものではなく、事業を進めながら考えていく必要がある。状況を見ながら都度振り返りを行い、引き続き検討していきたい。

■第5期に向けた取り組み

・KPIの統一とモニタリング

主要KPIを「地域びたり時間」「出会いの場数・のべ接点」「行動宣言率」「実装PJ化率」に統一し、事前・事後アンケートで定量的に測定。活動の成果を可視化し、改善につなげる。

・地域教育事業の強化

学校だけでなく学校外活動も一連の導線として設計。ロールモデルとの接点を増やし、高校生が段階的に挑戦を重ねながら次の挑戦に進む流れをつくる。

・資金調達・広報の刷新

支援者向けにはインパクト指標と事例を組み合わせたパッケージを整備。自治体や学校向けには学びの可視化を前面に出し、活動の価値を伝えやすくする。

・資金調達とリソース配分の対応

誰にどのような価値を提供すれば資金を集められるかの明確化や、事業の妥当性・リソース配分について、事業を進めながら検討を重ねる。

【2】第4期 各事業の報告

学校教育事業		
1	桜坂高校 「桜坂タイム」 授業サポート	○実施概要 石巻唯一の市立高校である桜坂高校にて、総合的な探究の時間「桜坂タイム」の授業企画案作成及び授業実施と地域コーディネートによるサポート業務を行う。 ○主な支援活動 2学年：個人探究支援、夏休み課外活動コーディネート 212人 17回 ○成果と課題 2023年度に開始した「個人探究」のカリキュラムを、今年度は教員主体でブラッシュアップして実施した。個別フォローの不足という課題に対しては、一斉授業とテーマ別の担当教員配置、さらにスタッフの相談窓口を設けることで対応した。 テーマ設定前の「情報収集」の授業を充実させ、生徒がインプットから問いを立てやすい構成に変更。結果として「自分の好き・興味」を起点に主体的に取り組む生徒が増えたという声が教員から上がっている。また、夏休み後の地域事業所への訪問インタビューを必須化し、実践的な調査やコミュニケーション経験を得られるようにした点も大きな改善であった。 課題としては、個人探究にしたことで、地域課題を解決するなどのテーマが少なく、地域と関わる機会が持ていないため、コーディネーターとしての役割が薄れていることがあげられる。積極的に地域と繋ぐ機会を授業に取り入れたい。
2	石巻西高校 総合的な探究の時間 授業サポート	○概要 石巻西高校の総合的な探究の時間の授業サポート。一昨年度までは文部科学省「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」の指定校予算で実施し、昨年度より独自予算によるサポート事業を受託。 ○主な支援活動 ・1学年：街ライブラリー、街ミッション（課題解決型 フィールドワーク） 160人 各27回 ・2学年：街クエスト（探究テーマを深めるための地域フィールドワーク） 158人 5回 ・3学年：課題探究活動（自由テーマ研究） 157人 1回 ・1～3学年：各種講演会（探究活動講演会）コーディネート、 課題研究発表会・全体発表会の運営及び記録 1回 ・地域協働事業推進委員会の参加 ○成果と課題 同校は地域連携の取り組みを積極的に行っており、各学年の授業においても、地域でのフィールドワーク等に重きをおいている。その中で、学校と当団体の役割や目指すところを協議し、地域とのコーディネート業務に一層注力することとした。役割を明確にすることで、学校との連携も更に円滑で効果的になっており、生徒と地域の繋がりが授業の枠を超えて継続的な取り組みになるなど、成果が出ている。 現在学校と協働で「地域連携協議会（仮）」設立に向けて準備を進めており、地域との繋がりが一過性のものではなく、持続可能なものとなるように基盤を固めることが課題となっている。

3	石巻高校 総合的な探究の時間 授業サポート	○概要 石巻高校の総合的な探究の時間の授業サポート。宮城県教育委員会による「進学拠点校改革推進事業」の指定校に石巻高校が選ばれ、その予算にて「地域コーディネーター」の委託事業者として「地域協働による探究活動」をサポートした。 ○主な支援活動 ・1学年：グループ探究活動支援、夏休み課外フィールドワークサポート探究授業プログラム作成 185人 16回 ・2学年：個人探究支援、夏休み課外活動コーディネート 200人 1回 ○成果と課題 主に1年生に向けて「学生版from VOICE」のパッケージを活用した授業を第3期に引き続き実施した。2024年度は授業の設計・進行を担っていたが、2025年度は地域連携に重点を置き、企業・団体の紹介や依頼の仕方についての講義、相談対応を主として行った。長期休暇に行う地域企業への取材では、昨年度よりも多くの生徒が実際に地域で取材を行うことができた。 継続的な地域との関わりが少なく学校と地域の企業等との繋がりも少ないため、学校主体で地域と協働した探究活動を行えるよう支援していくことが必要である。
4	社会人との対話による キャリア発達支援 事業 (ミライブラリー)	○概要 中高生が地元地域で働く若手社会人の先輩と対話することで、「生きること」や「働く事」、「地元地域」について考える機会をつくる事業。高校生への事前授業や振り返り、参加する社会人向けに事前研修も行った。 ○実施校 石巻市立石巻桜坂高等学校 1年 119人 宮城県石巻商業高等学校 1年 105人 宮城県石巻北高等学校 1年 104人 宮城県南三陸高等学校 1年 48人 宮城県蔵王高等学校 2年 38人 南三陸町立志津川中学校 3年 46人 南三陸町立歌津中学校 3年 29人 ○成果と課題 プログラム内容やワークシート等の情報を精査し、安定して質の高いプログラムを提供できるよう基礎資料や運営方法のブラッシュアップを行った。それにより、南三陸地域や仙南地域といった石巻地域外からのニーズにも対応することが可能となり、石巻地域以外でも本プログラムの実施が安定して行われるようになった。 職場体験や企業説明会とは異なる、社会人の生き方や地域での取り組みについて触れる機会は貴重なものであると、学校や生徒からの評価は高く、継続的な実施を求められている。 石巻地域での実施が減少しており、キャリア観の醸成以外に「総合的な探究の時間」に関連したプログラムとしての再構築や、中学校での展開についての検討等が課題となっている。

地域教育事業		
1	石巻で自分の好きを見つけるボランティア「まきボラ」	○概要 高校生・大学生が、自ら興味を持った地域の団体や企業を選び、授業外での自発的なボランティア参加(単なるお手伝いで終わらない成長につながる活動)を通して「地域の魅力」と「自分の好き」を見つけるプログラム。毎年夏と春に開催する「長期休みまきボラ」と、年間通してイベント等のボランティアを募集する「単発まきボラ」の企画・マッチングを実施。事前と事後のフォローに力を入れ、参加者の目標設定や当日の相談、振り返りなどのサポートを行った。当日のサポート役には、過去に参加した高校生や大学生が同行し、学びの言語化を手伝う。活動をサポートする学生インターンの育成も行った。 ○参加高校生数、まきボラ実施プログラム数 のべ参加人数 148人 コーディネートプログラム数 45件 ○成果と課題 今期は受け入れ事業所数が大幅に増えたことで参加枠が拡大し、高校生・大学生にとって挑戦の機会が広がった。また、単発の「まきボラ」依頼が増加したことで、長期休みだけでなく日常的にも参加できる場が生まれ、より多様な挑戦が可能になった。3年目を迎えた今期は、事業所側の協力体制も整い、地域の皆さんと一緒にプログラムをつくっていく基盤が強化された。WEBサイト・SNS・口コミを通じた募集依頼も増え、「まきボラ」が地域に浸透しつつある。 2025年度夏のまきボラでは、事業所説明の内容を人となり伝わる構成に変更し、参加者の目標設定や振り返りの仕組みも改善した。これにより学びの深まりが促進され、事後アンケートでは挑戦実感について9割の参加者が10段階中7以上と回答した。また、「石巻の知らなかった魅力を知れた」「地域には面白い大人が多いと感じた」など、地域への興味関心や楽しさを示す声が多く寄せられた。 さらに、過去参加した高校生が当日のフォロー役としてインターン活動できる仕組みも導入し、自分に合った形で挑戦を継続できるようにした。その結果、今期は高校生・大学生合わせて18名がインターンとして参加し、過去最多となった。 一方で、参加後も継続的に地域で挑戦する高校生がまだ少なく、事業所との関係が一度きりで終わってしまう点が課題である。今後はボランティアチームの組成や、参加者ごとに適した地域情報の定期発信など、継続的な接点づくりに取り組んでいきたい。
2	高校生の職業体験型ボランティア「DIVE！」	○概要 主に夏休み期間を活用して、高校生が石巻地域の事業所の「リアルな課題」に向き合い、実際の現場を体験しながら事業所からのミッション達成に挑戦する「職業体験型ボランティア」。今年はプログラムを『アイデアDIVE！』と『アクションDIVE！』の2フェーズに分けて実施。広報やイベント企画、パンフレット編集等、高校生が普段できない貴重な社会経験を経て、主体性の獲得やキャリア形成、地域の理解につなげることを目的としている。 ○実施対象者、受け入れ企業数 ・高校生：9名（応募：11名） ※1事業所につき、2～3名のチームで活動 ・受け入れ事業所：4社 ・全体成果報告会参加者：38名（高校生・受け入れ事業所・運営スタッフ含む） ○成果と課題 広報やイベントの実施、新しい取組のアイデア等、事業所が普段の業務をこなす中では中々推進しにくいようなことを、高校生の柔軟な発想と行動力によって実現できたことは大きな成果だと考える。その証として事後アンケートでは、受け入れ事業所全員が「想像以上の成果が得られた」との回答があった。 また、高校生全員が「今回の経験は今後の人生において役に立つ」と回答しており、単なる職場体験やボランティアを越える有意義なプログラムとなった。さらには、「地域への興味関心」や「地域での活動意欲」の数値が10pt中約1ptも上がっており、高校生と地域を繋ぐプログラムとしても効果的であることが分かった。 今後の展望としては、今回のような高校生と事業所の関係性をより継続的に生み出せるような仕組みを考えていきたい。また、活動の日程がどうしても長期となるため、参加のハードルや活動時のモチベーション低下等の懸念があるため、引き続き工夫を続け、より高校生にとって参加しやすく、主体的な関わりを引き出せるようなプログラムに改善していきたい。

3	放課後探究サポート活動	○概要 学校と連携し、放課後の空き教室で、探究活動ややりたいことの支援、進路等の相談にのる活動を実施。授業サポートだけでは拾いきれない高校生のもっと探究をしたい、相談をしたいというニーズに応えていった。 ○実施頻度、人数 ・石巻西高校及び石巻高校での実施 のべ 68人 15回 ・中高生の挑戦の伴走プログラム「たくらむ・いどむ・たのしむ『ムムム!』」 プレ企画 のべ35人 4回 ○成果と課題 授業のアドバイスだけでなく授業外での挑戦の支援にも繋がり、成果のある活動であった。会話を通して生徒とスタッフがナナメの関係を構築することができ、生徒が地域に関わる後押しをすることに繋がった。 ただし実施には人員確保と学校との協力が必要であり、今年度は2校までが限度であった。また自由に来れる場所であったために継続的な支援が難しく、探究の支援に繋がりがづらいという課題もあった。 そのため、学校単位ではなく、放課後にどの学校の生徒も集まれる居場所を開設し、一箇所に包括的に挑戦を応援できる場を作ることを目指す。中高生の挑戦を応援するプログラムとして、「たくらむ・いどむ・たのしむ『ムムム!』」の名称で5月から限定的に場を開放するプレ企画を行なった。来期10月から本格始動する。
4	「高校生のためのいしのまき探究図鑑」を活用したキャリア教育授業	○概要 一昨年度のハタチ基金助成により作成した冊子を活用し、高校生が自分の興味関心に基づいて、気軽に石巻地域について知ったり、アクセスしたりできる環境を作り、地域への興味・関心を育む機会を設けた。 今年度にはWebサイトを作成し、よりアクセスしやすいように工夫した。また、掲載事業所数も約100事業所と数を増やした。 ○授業実施校数、冊子配布校数 ・活用プログラム提供：高校3校
石巻市地域おこし協力隊受入支援業務		
1	石巻市地域おこし協力隊サポート事業	○概要 石巻の地域活性に寄与する地域おこし協力隊が、安心して円滑に活動を行えるように石巻市と連携し、隊員および受入事業者のサポートを行った。具体的には、募集や広報など地域や受入事業者とのマッチング、隊員研修、受入事業者研修、面談での個別サポート、全体活動報告会の運営など。 一般社団法人 ISHINOMAKI2.0 とのコンソーシアム事業。 ○実施内容 サポートした隊員数：10名 ○成果と課題 2025年2~3月に4名の隊員が任期を終え、新たな受入事業所・隊員の募集と選考を経て、新規隊員が増加した。2025年4月以降の研修体制を大きく見直し、隊員に対しては毎月開催とし、隊員の状況に応じた座学やフィールドワーク、交流プログラム等を取り入れることとした。それにより、隊員同士の交流が深まり、活動への意欲向上や心理的安心にも繋がっていると思われる。 今後は卒隊に向けて、地域への定着や個々のビジョン実現に向けて等、早期からの状況把握やサポートがより一層必要となっていく。

【3】第4期 組織基盤の整備・強化の取組報告

組織基盤の整備・強化		
取組 1	法人としてのビジョン・ミッション・成果目標の再設定	○目標 法人のビジョン・ミッション・成果目標（アウトカム）を見直し、短期～中長期で設定する ○実施内容 ビジョン・ミッションについては、10月からスタッフとの議論や対話を重ね、役員との協議も踏まえながら検討を進め、2025年1月に刷新した。刷新後は、策定したビジョン・ミッションをより具体的に運用できるよう分解し、短期から中長期までを見据えた成果目標（アウトカム）を新たに作成した。これにより、法人としての方向性と評価軸をより明確にした。 ○評価 達成
取組 2	これまで実施してきた事業の再精査、事業毎の目的のブラッシュアップ	○目標 取組1で定めた成果目標を基に、各事業のブラッシュアップと目標の再設定をする ○実施内容 各事業（プログラム）について、取組1で定めた成果目標を基盤として事業目標の再設定を行った。あわせて、年度（4月開始・3月終了）のサイクルに沿って事業運営と評価が進められるよう、プログラムごとの計画を見直し、必要な調整を行った。その上で、各事業が成果目標に確実に接続するよう、運営体制と進行管理の仕組みを整えた。 ○評価 達成
取組 3	石巻地域が「人的資本主義」のまちとなるためのアプローチ	○目標 当法人の石巻地域における、役割・領域・獲得したいポジションなどを明確にした上で、地元企業・団体及び行政へのアプローチについて、目標・手法・手段を検討し決める ○実施内容 スタッフとの打ち合わせや役員相談会において、石巻地域における法人の役割・領域・獲得すべきポジション、さらに企業・団体・行政への関わり方について検討を重ねた。現時点では明確な結論には至っていないが、法人の成果や取組価値を定量・定性の両面から可視化するため、「インパクトレポート」の作成を進めることとなった。 ○評価 未達成。次期に引き続き継続的に取組んでいきたい
取組 4	法人の組織基盤づくり	○目標 スタッフの個別面談、視察研修を継続していく。地元企業・団体及び個人から「10年先の投資」として寄付金を集める（目標額：100万） ○実施内容 スタッフ面談については、理事の三上氏にも参画してもらい、月次での振り返りや次の挑戦を考える機会を継続的に設け、個々の成長と課題整理を促す体制を維持した。視察研修については、5月に気仙沼の「まるオフィス」を訪問し、地域での実践事例や組織運営の工夫について意見交換を行い、今後の事業改善に活かせる示唆を得た。寄付金に関しては、「みやぎチャレンジプロジェクト」（2024年）に応募し、法人の趣旨や将来への投資価値を丁寧に伝えた結果、目標を上回る120万円の寄付を獲得した。 ○評価 達成